

市政耳より情報:考えよう 防災とボランティア活動

1. 「防災とボランティア週間」とは

平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」を踏まえ、災害時におけるボランティア活動及び自主的な防災活動についての認識を深めるとともに、災害への備えの充実強化を図ることを目的に、毎年1月17日は「防災とボランティアの日」、1月15日から1月21日までを「防災とボランティア週間」とされております。

この機会に、自主的な防災活動や災害時におけるボランティア活動について、あらためて認識を深めてみましょう。

2. 防災対策における市の取り組み

①身の回りの危険性を知るために

ご自分のお住まいの場所やその近くに、どのような災害の危険性があるのか、家族や地域における避難の方法などについて考えるきっかけとして、これまで、「河川洪水ハザードマップ」、「津波ハザードマップ」、「防災マップ」を作成し、ホームページで公表しています。

<http://www.city.iwaki.fukushima.jp/bosai/5094/index.html>

②自主的な防災活動のために

市のホームページ・トップ「いざという時に」から、「防災」をクリックしてください。

「ハザードマップ」のほか、「災害への備え」、「自主防災」など、様々な情報を掲載しています。

<http://www.city.iwaki.fukushima.jp/bosai/5092/index.html>

また、地域における「自主防災組織」の結成の促進と育成指導を図っていますので、是非、お気軽にお近くの支所又は消防署に相談してみてください。

③災害に備えて

市では、災害が発生し、避難を余儀なくされた場合に備え、缶詰め乾パン 85,920 食、缶詰めのパン 4,080 食併せて 9 万食分の食糧品、毛布 5,700 枚、災害時用トイレ 566 式、車椅子対応型トイレ 13 式、避難所生活のプライバシー保護のための簡易組立型間仕切りを備蓄しています。

日ごろ、それぞれのご家庭で比較的保存の利く、水や食糧を中心として備蓄しておくことが大切です。非常用の持ち出し品なども含め、再点検・再確認してみることをお勧めします。

特に、乳幼児や年配の方のために、普段の暮らしの中で必要な常備薬や必需品については、是非、この機会に点検し、いざという時でも、不足しないよう備蓄しておくことが大切でしょう。

3. 災害時の支援制度

残念なことに、被害が発生してしまった場合、早く、「元通りの生活」に戻りたいと願うのは、誰もが同じ思いです。

市では、国や県など関係機関と連携を図りながら、応急復旧対策や早急な生活再建を支援するため、物心両面での支援に努めることとしています。

なお、ホームページ「防災」>「災害への備え」>「被災者救済制度」に、詳細を掲載しています。

<http://www.city.iwaki.fukushima.jp/bosai/5090/002889.html>

また、住宅や家財などについては、火災保険や地震特約などがありますから、「り災証明」を発行することにより、自助努力を支援することとしています。

4. 自主防災活動の取り組み

自主防災組織とは、「自分たちのまちは自分たちで守る」という防災意識と強い連帯感を持ち、地域のみなさんが自ら防災活動を行うため、各地区の行政区を単位として設立する組織です。

自主防災組織をつくる過程で、災害の悲惨さを話し合ったり、役割分担を決めることなどにより、地域のみなさんの防災意識が高まり、より実践的な防災活動が実施できるようになります。また、災害発生時においては、初期活動を行ったり、駆けつけた防災関係機関の職員に、地域の被災状況を正確に伝えることなどにより、人命の救助及び被害の拡大防止に大きく貢献することにつながります。

市では、ヘルメットや電池メガホン、担架などの機材、また、阪神・淡路大震災で効果のあった救助用ロープや万能斧、手引きのこぎり、油圧ジャッキなどの救助用資機材を購入する際には、その費用の一部を補助します。さらに、消防署員による「消火訓練」、「応急手当講習会」、「資機材の使用法の講習会」、「災害図上訓練(いわゆる DIG)」なども実施しています。

また、NPOふくしま災害ボランティアコーディネーター支援センターでは、「日常生活において、お互いの顔が見える生活を取り戻し、よりよく生きる環境づくりが重要」との思いを強くし、いわき明星大学と連携して防災に関する人材育成活動をされています。たいへん、心強いですね。

5. 自然災害に備えて普段から気をつけること

被害を発生させない、仮に、被害が発生しても極力被害を最小限にとどめることが重要です。

そのためには、普段から、自然災害の特性を知るなど、それぞれに予防的な対策や措置が大切となります。

例えば、地震から身の安全を確保するためには、日常生活において、家具等の転倒や落下防止ができていないか、点検しておくことが大切です。

特に、寝室であるとか、テレビや冷蔵庫、コピー機やロッカー、食器棚や本棚など、日ごろ

「使い慣れ」しているものなどは、揺れによって危険な凶器になるかもしれません。以外と見落としがちですので、注意が必要です。

また、家はもちろん、石垣やブロック塀など倒壊すると危害を加えるおそれのあるものについては、老朽化が著しい場合は撤去するか補強改修を考えるなど、思い切った判断も必要な場合があります。

そのほか、例えば、周囲より比較的低くなっている土地、昔、川が流れていた場所や田んぼを埋め立てた場所などは、台風や大雨のときは、特に注意が必要です。

また、地下道や地下駐車場なども例外ではありませんし、道路の側溝が普段からつまり気味であるとか、そういう場所は、局地的な集中豪雨などによって、水を流しきれずに、あっという間に溜まってしまうということが考えられます。

日ごろから、自宅周辺の排水路や側溝などを点検し、地域ぐるみで掃除するなど心がけたいものです。

なお、昔の人は、危険な場所や災害の記録を地名や物語として後世に伝承しようとしたので、その地名に関心を持つことで、注意が必要な場所を知る手がかりになります。

万が一、地震や台風・大雨などで、大きな被害が発生してしまった場合は、特に、ご家族が別行動しているときなどその安否の確認方法について、ご家族みなさんで話し合っておくことも必要でしょう。

また、避難を余儀なくされた場合の避難先であるとか、安全な避難経路についても、ご家族や地域の皆さんと話し合い、日常生活において、一人ひとりが注意し、点検する習慣を身につけておきたいものです。

6. 災害時におけるボランティア活動 など

災害が起きたとき、あるいは、災害が起きそうだと想像することが大切です。

「悪いこと」は、できれば考えたくありません。

しかし、災害は、「悪いこと」が幾重にも重なって起きてしまうおそれがあります。

したがって、日ごろ、「危険だな」と感じることは、予防的に何等かの対策を打つ。

いざというときには、自分の身の安全を確保することが大切です。

自分の身の安全が確保できれば、身の回りの危険を回避することができるわけですから、次に、「自分ができることは何か」考えることができるのではないのでしょうか。

これまでも、阪神・淡路大震災や新潟中越地震など、全国から多数のボランティア活動で被災地入りをされたという報告がありますが、被災地での支援活動を希望される場合は、ボランティア活動だからといって、被災地や被災者に負担を強いることのないよう、細心の注意を払い、入念な準備と的確な活動に心がける必要があるものと思います。

この機会に、市公式ホームページに「防災とボランティア週間」に関する記事を掲載していますので、是非ご覧になってください。

<http://www.city.iwaki.fukushima.jp/bosai/5090/007711.html>

本日、放送した内容など、様々な情報を満載しています。

ホームページ・トップ「いざというときに」から「防災」をクリックしてみてください。

<http://www.city.iwaki.fukushima.jp/>

「防災とボランティア」をテーマに放送してまいりました。

「防災」というと専門的で難しい感じがしますが、「危険を回避するために」は「自分ができることは何か」を考えることが大切ということでした。

また、「自分の身の安全を確保できれば、次の行動に移せる」ということでしたね。

番組の最後になりますが、これだけは伝えておきたいということありますか？

「情報」について、考えてみたいと思います。

まず、「情報」は、至るところに隠れています。

テレビやラジオ、本やインターネットだけではなく、五感で受け止める「情報」があると思います。

「情報」は、与えられるものではなく、自らとりに行く努力、当然、情報の意味することについて、理解する努力が求められると思います。

いくつか、事例を紹介したいと思います。

いわき未来づくりセンター発行の「地名の変化に見られる、いわきの近代化」に興味深い記事があります。「地名」について、その由来が巻末にまとめられています。

また、先日、「日本災害情報学会」会員の方が、こんなことを話されていました。

地元の人が

『そこは 100 年前に地すべりがあったからやめた方がいい』

と言われたのに、

『何かあったら逃げればいいんだから』

と言って、建物をつくった。

そして、10 年が過ぎ、土砂災害で逃げる間もなく被害が出た。

という話で、「建物を建てたのは、よそから来た人だった。」そうです。

どこでも、「安全」は、与えられるものではないということ。

自らの「危険を回避するため」には、最低限の「情報」と勇気ある「行動」が必要ではないか、という話として、受け止めたところです。